

「輪」の広がり

5年 N・Iさん

この夏、私は品川区が災害時相互援助協定を結んでいる宮古市のツアーに参加しました。宮古市田老地区の津波遺構たろう観光ホテルで当時の社長さんが撮った「奇跡の四分」を見て、初めてこんな高さまで津波が来たことを実感しました。また、ホテルの一階や二階は柱しがなく、ショックを受けました。

大沢の人たちのすごいところは、一人一人が自分ができることはないかと考えて、それを行動に移していることです。おそろしい揺れに会い、家も流されてしまったり、自分の家族がどこにいるかも分からないという状態になれば、普通は自分のことで精一杯になってしまっはすです。でも、特に大沢の子どもたちは水くみなど、自分たちにできることを探して、実行できました。それは新聞づくりで、怖気づかずにアイデアを発表したり、その中から取捨選択することがきたえられていたからだと思います。

私は今まで、新聞は事実を伝えるだけだと思っていました。なぜなら、新聞を読んでいて、思いが伝わってきたことがなかったからです。しかし、この本を読んで、特に手書きの新聞は思いを伝え、読んだ人を幸せにしたり、はげましたりするものだと思いました。子どもたちから新聞を読んだ人に、そして読んでいない人にも伝わったので、「輪」のように「自分ができることを考える」人が増えていったのだと思います。

今年は関東大震災から百年の節目の年です。これから何年後に関東がとても大きな地震に見舞われるかわかりません。しかし、大沢を見習うことで少しでも被害を小さくすることができるかと私は考えています。現地の人の生の声を聞いた私は、災害が起きていない今にそれを手書きの新聞にまとめ、学校みんなに伝えたいです。そして、それが「輪」のよつこに広がってほしいです。